第百五十四話 マニラ無防備都市宣言

2016 (H28) 年1月、天皇陛下 (現上皇陛下) は、フィリピンへの親善訪問出発時の 「お言葉」で"マニラ市街戦"に言及された。フィリピンの首都マニラは大東亜戦争 間、日本軍の占領、米軍の占領という稀有な二度の占領に見舞われた。1945 (S20) 年2月から3月にかけての「マニラの戦い」では、最大規模の市街戦が起き、10万 人の市民が犠牲になったと云われている。幾つかの論点があり、それについて述べた

1 「マニラの戦い」の概要

I shall return と宣って比を脱出したマッカーサーは、1944 年には比奪還に着手 した。日本は、レイテ沖海戦、次いでレイテ島の戦いで敗北した。比守備に任ずる山下 奉文大将率いる第14方面軍は、マニラの無防備都市宣言を検討するものの、宣言には 至らず、軍はマニラの放棄を決定した。この方針に対し、海軍部隊は残留死守方針で陸 戦隊を編成し、市街戦の態勢を採った。一部陸軍部隊も残留した。1945 (S20) 年1月、 連合軍はルソン島に上陸、米 14 軍団は 2 月 3 日マニラ地区に突入した。マニラ市街地 では、日米の戦闘に巻き込まれて市民が犠牲となった。3月3日、米軍はマニラでの戦 闘終結を宣言した。

2 マニラの無防備都市宣言問題

第14方面軍司令官山下奉文大将は、ルソン島での長期持久方針に決し、マニラは、 日本軍の比島攻略時と同じく無防備都市宣言を検討した。市民の被害の回避、短期間に おけるマニラ市民の避難の困難性が理由である。この方針により、陸軍部隊は一部を残 して、殆どマニラから移動した。ところが、第4航空軍富永恭二中将は強硬に反対、海 軍部隊もマニラ港湾の戦略的価値、陸戦への不安等から、岩淵海軍少将を長とするマニ ラ海軍防衛隊(マ海防)を新たに編成して市街戦に備えた。大本営陸軍部もマニラ放棄 には同意せず、結果的にマニラ無防備都市宣言は発せられなかった。

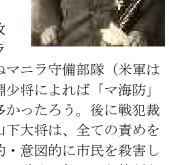
首都マニラの政治的価値は極めて高いものの、当時の日本軍の敗勢状況を考慮すれ ば、戦略的には放棄すべきであり、無防備都市宣言をして市民の被害回避を期すべきで あった。そのような視点を欠いていたのではないかと少々残念だ。富永中将は独断マニ ラ撤退を命令しているが、何ということか・・

山下大将の命に服すべき海軍及び第4航空軍の対応は理解し 難い。

2 市民の被害が、10万人規模に拡大したのは?

最新の研究成果によれば、被害者の4割は米軍の無差別砲撃 によるものであるという。米軍も当初は慎重であったが、米軍 の被害が続出するに従い方針を転換して無差別砲撃を行ったの である。

米軍に内通する市民も多く、ゲリラ化して日本軍に対して攻 撃をする者も多く、已むなく撃退している。市民なのかゲリラ



なのかの判別は極めて困難であったと云う。脱出もままならぬマニラ守備部隊(米軍は 「囲師必闕」を知らなかった?)が無謀な行動をした? 岩淵少将によれば「マ海防」 は鳥合の衆であったという。無秩序な防御による市民被害も多かったろう。後に戦犯裁 判で虐殺と指摘されるような事案も多々あったのだろうが、山下大将は、全ての責めを 負って従容と絞首刑を受け入れた。古武士の観がある。意識的・意図的に市民を殺害し たと日本軍の大々的な虐殺があったとする論もあるが、そこまで酷くは無かった筈だと 信じたい。

*南京事件の捏造と誇大化とは違い、比はマニラ市街戦被害を殊更に言い募ることなく大 人の対応をしている。この差は何だろう。それにしても、大規模な市民被害が予想され る市街戦を如何に避けるかは重要な課題である。